

## ゲルク派小史 (上)

ツォンカパ = ロサンタクパ (Tsoñ kha pa Blo bzah grags pa, 1357-1419) は、晩年弟子たちの進言に従って、それまでの遊行生活を改め、ロリ山に僧院を設けてそこで暮すことになった。その僧院は、弥勒菩薩の宮殿の名称「兜率天」に因んで、ガンデン寺と名づけられた(正式の名称はロリウオチェ = ガンデンナムバルギアルワ、hDrog ri bo che dGañ ldan rnam par rgyal ba)。以来ツォンカ

パを祖師とする流儀を「法主ガンデンの流儀 (Chos rje dGañ ldan pañ lugs)」と呼ぶようになった。

この名称を省略した呼び名「ガル派 (dGañ lugs pa)」は、しかしながら、呼称として呼びにくいために定着せず、その転訛した形「ゲルク派 (dGe lugs pa)」或いは「ガンデン派 (dGe ldan pa)」という名で呼ばれてくる<sup>①</sup>。この宗派は別名「黄帽派」とも呼ばれる。それは、当時

ツルティム・ケサン  
小谷 信千代

衰頹の危機に瀕していた戒律の教えを再興するために、祖師が帽子の色を昔の戒律を厳守した比丘たちの帽子の色と同じ黄色にしたことに由来する。以下にツォンカパの伝記のあらましと、彼から始まるゲルク派の歴史の概略を紹介することしよう。

### 一 ツォンカパ略伝

ツォンカパには多数の伝記があるが、主要なものとしては、直接の弟子ケートツ (mkas grub je dGe legs dpal bzah po, 1385-1438) による

rje btsun bla ma Tsoñ kha pa chen pohi no  
mtshar rmad du byun bañ rnam par thar pa  
dad pañ hjug hogs (Tol. No. 5259, 略題 Dad pañ  
hjug hogs)。

rje rin po chehi gsañ bahi rnam thar rgya mtsho  
lta bu las cha śes nun nū shig yōis su brjod pañi  
gtam rin po chehi sñe mo (Toh. No. 5261, 略題  
gsañ bahi rnam thar).

これら二著を掲げることができるとであらう。

また歴史的な検討を加える資料としては、トツカン  
(Thupā bkwan Blo bzai chos kyi űi ma, 1737-1802) の  
Grub mthap thams cad kyi khwis dan hdod tshul  
ston pa legs bśad śel gyi me lon (略題 'Thupā  
bkwan grub mthap) のゲルク派の章 'Gedan Sun-  
grab Series, Vol. 2.

を参考にすべきであらう。これらの資料に関する詳しい  
文献研究は別の機会に譲ることとして、ここでは、これ  
ら三資料に依って、ツォンカパの生涯を概観してゆきた  
い。

## (一) 出生

ツォンカパ = ロサンタクパ (Tsoñ kha pa Blo bzai  
grags pa, 1357-1419) は、東部チベット、ツォンカの  
آمد (A mdo) の地に、父ルブンゲ (Klu hbum dge) と  
母シンサブチ (Śin bzab a chos) の間に、六人兄弟の

第四子として生れた。ツォンカパとは、従って本名では  
なく、ツォンカの人という呼称である。

ツォンカパが生まれる前の年の暮れ、両親はそれぞれ  
夢を見た。父の夢には、五台山から来たという比丘が、  
花の袈裟と黄色の絹の内衣(禪裙)を身につけ、手には  
書籍を持って現われた。比丘は宿を請い、最上階の仏間  
に入っていた。母の夢には、花の咲く野原で、多くの  
女たちと一列になって並んでいる所に、白い少年と赤い  
少女とが訪れて、二人で彼女を沐浴させた。

翌年の正月十日の夜、父は、毗沙門天の宮殿柳葉隅か  
ら投ぜられたと思われる黄金の金剛 (vajra) が、妻の体  
内に溶け込む夢を見た。母は、空中に観音の金像が太陽  
の如くに輝き、それが彼女の方にやって来るのを、多く  
の人々と共に、様々な楽器や供物を以て出迎えている時  
に、その金像が次第に小さくなり、彼女の体内に溶け込  
んだ夢を見た。

彼が生まれる直前に母は、一人の少年が訪れて、ガラ  
スの鍵で彼女の胸の小さな扉をあけて、彼の前世の金像  
を洗っている、という夢を見た。

このようにしてツォンカパは、第六のラブチュン (rab  
byun) の丁酉の年(一三五七年)にこの世に生を受けたの

である。<sup>②</sup>

### (二) 受 戒

三歳の時に、カルマ派 (Karma pa) のロルウィドルジ  
ェ、(Rol bahi rdo rje 第四世カルマ、1340—1383) から優  
婆塞戒を受け、クンガニンポ (Kun dgañ sñin po) の  
名を与えられる。八歳の時にチェジエ = テントゥプリ  
ンチエン (Chos rje Don grub rin chen) から沙弥戒と十善  
戒を受け、ロサンタクパ (Blo bzah grags pa) の名を与  
えられる。十六歳の年に中央チベットに趣く。<sup>④</sup>

それが何歳の頃であったかは諸伝記中にも明らかでな  
いが、ヤルルンのナムギャル (Yar lun Nam rgyal) 地  
方のパンチエン = シャーキャシュリーの戒律の伝統を継  
承しているチヨクチエンポ寺の和尚ソルティム = リンチ  
ェン (Tshul khribs Rin chen pa) が親教師 (upadhyaya)  
となり、チェジン寺の和尚シエラフ = ヨンポ (Ses rab  
ngon po) が羯磨師となり、持戒者ソナム = ドルジエ  
(sdon brtson bsod nams rdo rje) が秘密の教授師とな  
り、デビゲドワン (Dad pahi dge hdun) が証明師とな  
って具足戒を受けた。<sup>⑤</sup>

### (三) 修 学

#### (1) 般若の学習

大学堂デワチエン学堂に行き、ネタンの僧タシセンゲ  
(bKra sis sen ge) と、ヨンタンギャツォ (Yon tan rgya  
mtsho) と、ラマ = リンポチュエ = ウギャンバ (Bla ma Rin  
po che U rgyan pa) などに『現觀莊嚴論』 Abhisama-  
yālamkāra とその注釈を学び、わずか十八日間で理解  
した。

ラマ = ザムリンバ (Blo ma rjam rin pa) からは弥勒  
の五部論のそれ以外の書について学んだ。

ニャオン = クンガバル (Na don Kun dgañ dpal) の  
許では、般若思想の極めて深遠な説明を、ただ一度聞い  
ただけで会得した。般若関係の学習に際しては、

『十万頌註釈』 (Pek. No. 5203)

『聖般若波羅蜜多母撰頌』 (Dignāga, Pek. No. 5207)

『如理論聚』 (Nagarjuna, Pek. Nos. 5224-5228)

『般若波羅蜜多優波提舍現觀莊嚴頌』 (Pek. No. 5184)

『聖二万五千頌般若波羅蜜多優波提舍論現觀莊嚴註』

(Ārya Vimuktisena, Pek. No. 5185)

『聖二万五千頌般若波羅蜜多優波提舍論現觀莊嚴頌』

(Bhadanta Vimuktisena, Pek. No. 5186)

『般若波羅蜜多優波提舍論現觀莊嚴と名づくる註』

(Haribhadra, Pek. No. 5191)

『聖八千頌般若波羅蜜多釈現觀莊嚴明』 (Haribhadra,

Pek. No. 5189)

『一万五千頌般若波羅蜜多』 (Pek. No. 5188)

『薄伽梵功德宝集頌細疏』 (Haribhadra, Pek. No. 5190)

『集頌細疏』 (Buddhaśrījāna, Pek. No. 5196)

『現觀莊嚴頌註具足淨』 (Ratnākaraśānti, Pek. No.

5199)

『聖般若波羅蜜多八千頌細疏最上心髓』 (Ratnākara-

śānti, Pek. No. 5200)

『聖般若波羅蜜多心經廣疏』 (Vimalamitra, Pek. No.

5217)

『聖能断金剛般若波羅蜜多廣釈』 (Kamalaśīla, Pek.

No. 5216)

『般若波羅蜜多優婆提舍現觀莊嚴頌註疏語句開明』

(Dharmamitra, Pek. No. 5194)

『經莊嚴疏〔大乘莊嚴經論〕』 (Vasubandhu, Pek. No.

5527)

『大乘莊嚴廣註』 (Asvabhāva, Pek. No. 5530)

『經莊嚴總義』 (Jñānāśrī, Pek. No. 5533)

『經莊嚴釈疏』 (Sthiramati, Pek. No. 5531)

『究竟一乘宝性論』 (Asaṅga, Pek. No. 5526)

『中辺分別註』 (Vasubandhu, Pek. No. 5528)

『法法性分別註』 (Vasubandhu, Pek. No. 5529)

『中辺分別論釈疏』 (Sthiramati, Pek. No. 5534)

これらのテキストの語義を全て理解し、<sup>⑨</sup> あるいは二年を費して弥勒論書を完全に習得した。

## (2) 律と阿毘達磨の学習

『俱舍論』はレンダワ (rje btsun Red mdah ba gshon nu blo gros, 1349-1412) から、一語一語を指し示すようにして教えられた。レンダワの説明は、単にテキストの言葉だけに依らず、論の大綱を完全に把握し内容を整理して分り易く解説するという仕方で行われたので、レンダワに対して非常な信頼を生ずるようになった。彼からは『俱舍論』のみならず、『入中論』『阿毘達磨集論』般若学、律なども学んだ。ツォンカバは、中観や論理の理論に関する理解をレンダワの許で初めて得ることができたので、彼を自分にとって他に比べべきものなき最高のラマである、と考えている。<sup>⑩</sup>

キョルモルン (skyor mo lun) の和尚であり、四大典

籍（現在ゲルク派で学ばれている五大典籍中の四つ）の習得者であるロサルバ（Blo gsal pa）は、律と『俱舍論』とに精通している人として知られていた。その勝れた持戒者の許で、『律經』（Guṇaprabha, Pek. No. 5619）とその註釈全てを学び、師の律に関する知識を全て体得した。その時、説明を聞くに際して、『律經廣註』（Dharmamitra, Pek. No. 5622）の最初から一七頁つづ、毎日暗記して、四十巻余りを覚えてしまった。<sup>⑧</sup>

学んだテキストは以下の如くである。

#### 律に関して

- 『律經註現說自解説』（Guṇaprabha, Pek. No. 5621）
- 『律經廣註』（Dharmamitra, Pek. No. 5622）
- 『律經解説』（Prajñakara, Pek. No. 5623）
- 『毘奈耶事廣註』（Kalyāṇamitra, Pek. No. 5615）
- 『律分別語句解説』（Vinītadeva, Pek. No. 5616）
- 『阿含雜事解説』（Dharmottara, Śīlapāliṭa, Pek. No. 5617）
- 『根本薩婆多部律撰』（Viśeṣamitra, Pek. No. 5606）
- 『波羅提木叉經廣註律集』（Vimalamitra, Pek. No. 5607）
- 『根本說一切有部毘奈耶頌』（Viśākadeva, Pek. No. 5625）

『聖根本說一切有部沙弥頌』（Sākyaprabha, Pek. No. 5626）

『聖根本說一切有部沙弥頌註具光』（Sākyaprabha, Pek. No. 5627）

『三百頌解説』（Vinītadeva, Pek. No. 5628）

#### 阿毘達磨に関して

『阿毘達磨俱舍論』（Vasubandhu, Pek. No. 5591）

『阿毘達磨俱舍註疏』（Yaśomitra, Pek. No. 5593）

『阿毘達磨俱舍註疏隨相』（Pūrṇavardhana, Pek. No. 5594）

『阿毘達磨集疏』（Jinaputra, Pek. No. 5554）

これらの阿毘達磨論書によって、大乘と小乗の無量の阿毘達磨の意味をよく決した。<sup>⑨</sup>

#### (3) 論理学の学習

先にレンダワに就き、その後ロツァワ・テンサン（Lo tsa ba Don bzar）に就いて学んだことを基礎として、七種の論理学のテキストと經『集量論頌』とをよく研究した。<sup>⑩</sup>

『集量論頌』（Dignāga, Pek. No. 5700）とその自註（Pek. No. 5701）

『量評釈註』（Dharmakīrti, Pek. No. 5717 (a))

『量評釈註疏』(Śakyabuddhi, Pek. No. 5718)  
 『量評釈註疏』(Bram-ze chen po, Pek. No. 5721)  
 『量評釈註の第三品』(‘Ni ma sbas pa, Pek. No. 5722)  
 『量評釈莊嚴』(Prajñakaraṅgata, Pek. No. 5719)  
 『量評釈莊嚴註疏』(Rgyal ba can, Pek. No. 5720)  
 『量評釈莊嚴註疏極圓淨』(Jamāri, Pek. No. 5723)  
 『量決択』(Dharmakīrti, Pek. No. 5710)  
 『量決択註疏』(Dharmottara, Pek. No. 5727)  
 『正理一滴廣註』(Dharmottara, Pek. No. 5730)

#### (4) 中觀の學習

當時チベットでは中觀の講説は甚だしく衰頹しており、レンダワからは『入中論』の説明を聞き得ただけで、『中論頌』を初め如理論聚の相承伝承を聞くことはできなかった。五如理論聚については、ナルタンの和尚クンガギヤルツェン(Kun dgaḥ rgyal mshan)とチワチェンパのラヤ、ザムリンパ(hjam rin pa)から相承伝承(luḥ rg-yun)を受けた。学んだ中觀論書は上記の如くである。

龍樹の五如理論聚(Pek. No. 5224-5228)及びその註釈『經集』(Nāgārjuna, Pek. No. 5330)  
 『四百論頌』(Āryadeva, Pek. No. 5246)とその月称の

註釈(Pek. No. 5266)及び仏護の註釈(Pek. No. 5242)

『中觀心論頌』(Bhāvaviveka, Pek. No. 5255)及びその自註(Pek. No. 5256)

『般若燈論』(Bāvaviveka, Pek. No. 5253)とその觀誓の註釈(Pek. No. 5259)

『入中觀論頌』(Candrakīrti, Pek. No. 5261)とその自註(Pek. Nos. 5262, 5263)及びジャヤナンダの註釈(Pek. No. 5271)

『中觀莊嚴頌』(Śāntarakṣita, Pek. No. 5284)とその自註(Pek. No. 5285)及びカヤランシーラの註釈(Pek. No. 5286)

『一諦分別頌』(Ye šes snin po, Toh. No. 3881)とその自註(Toh. No. 3882)及びカヤランシーラの註釈(Pek. No. 5287)<sup>⑨</sup>

『入菩提行論』(Śāntideva, Pek. No. 5272)

『大乘集菩薩學論』(Śāntideva, Pek. Nos. 5335, 5336)

『修習次第』(Kamalaśīla, Pek. No. 5310)

#### (5) 密教の學習

當時チベットでは、顯教と密教とは寒暑の如く、あい

対立するものと考えられていた。般若経を信ずる人々は

密教を事とせず、密教を信ずる人々は般若経を排斥した。そこでツォンカバは、顕密二教が相互に補い合うものであることを人々に知らしめんが為に、まず自ら密教を広く理解しようとして、キュンボヘバ (Khyun po lhas pa, プトンの弟子) の許で、瑜伽大マンドラを初め、所作 (kri-ya) 行 (carya)、瑜伽 (yoga) の三部のタントラの灌頂の伝統を受け、更に、ルイーバやナクボーバの流派に伝わる Cakrasaṃvara の教えなど無上瑜伽 (Anuttara-yoga) のタントラの灌頂の伝統をも受けた。かくしてキュンボヘバは、クンケン = パクパ (Kun mkhyen bPhags pa) プトン (Bu ston thams cad mkhyen pa, 1290-1364) の二人から継承した密教の教えを自分が受け継いだままに完全にツォンカバに伝えたのである。

更にリンポチェ = チェキパル (Rin po che Chos kyi dpal, プトンの弟子) の許で Kalacakra の註釈や実践法を学んだ。シャル寺 (Sha lu, プトンの住んでいた寺) では、プトンの系統をひく瑜伽行者ゴンサン (mGon bzau) について、瑜伽大マンドラの図像法や舞踏作法や声明法やマンドラ儀軌の註釈や手印 (金剛印、rdo rje dbyins) など<sup>④</sup>を学んだ。

所作タントラに関しては

『一切中國衆密本統』(Pek. No. 429)

『妙成就正行大本統修習次第分』(Pek. No. 431)

『最聖妙臂請問本統』(Pek. No. 428)

『聖妙臂請問怛特羅撰義』(Sams rgyas gsan ba, Pek. No. 3496)

『禪定後次第分』(Pek. No. 430)

『上靜慮分次第廣釈』(Sams rgyas gsan ba, Pek. No. 3495)

『聖者文殊根本本統』(Pek. No. 162)

『吉祥金剛暴惡密意本統』(Pek. No. 93)

などを学んだ。

行タントラはチベットにはあまり訳されず、主として『大毗盧遮那成仏神変加持経』(Pek. No. 126) を学んだ。

瑜伽タントラに関しては

『一切如来真实撰大乘現證三昧大教王経』(Pek. No. 112)

『一切如来真性集大乘現觀と名づくる怛特羅釋真性作明』(Kun dgañ snin po, Pek. No. 3333)

『真性集広釈俱差羅莊嚴』(Sākyañi bśes gñen, Pek.

No. 3326)

『恒特羅義入』(Sams rgyas gshan ba, Pek. No. 3324)

『密修習大金剛尖本統』(Pek. No. 113)

『吉祥最勝第一大乘思惟王統』(Pek. No. 119)

『吉祥最上本初広釈』(Kun dgah snin po, Pek. No. 3335)

『三界中勝甚意大王統』(Pek. No. 115)

などを学んだ。<sup>⑥</sup>

無上瑜伽タントラに関しては『ナムタル・スルテブ』に説かれているように、シャルでラマ・キュンボヘン = ションヌソナムに就いて四種のタントラの殆んどの灌頂の伝承と優婆提舎を受け、特にサキャ派とプトン派の瑜伽と無上瑜伽タントラの総てと、その中でも秘密集会のマルバ派の流儀とゴエ派及びアティシャの流儀などのインド伝来の流儀と、イエシエシャブ (Ye ses shabs) とクンニン (Kun snin) の流儀など、インドとチベットに伝わる伝承を受けて体得したのである。

秘密集会の根本タントラの伝承はレンダワから受け、イエシエシャブの流儀の灌頂などはプトンの第一の弟子ダツホパ = リンチュンナムギャル (sGra tshad pa Rin chen mnam rgyal) から受けたのである。

ヘーバジュラや勝楽タントラなどは、チエジエ = テントップリンチュン (Chos rje Don grub rin chen) から灌頂と説明と優婆提舎とを受けた。<sup>⑦</sup>

(a) 秘密集会タントラ系のものに関しては次のようなものを読んだ。<sup>⑧</sup>

『試一切如来身語意大密密聚大王本統』(Pek. No. 81)

『燈作明と名づくる広釈』(Zla ba grags pa, Pek. No. 2650)

『秘密集会恒特羅序説上師優波提舎註釈』

(Sgeg pahi rdo rje, Pek. No. 2773)

『智慧金剛集恒特羅中所出七莊嚴解』

(Śradhdhakaravarman, Pek. No. 2654)

『吉祥秘密集会註釈優波提舎決定』

(Rab tu shi bahi ye ses, Pek. No. 2706)

『吉祥秘密集会莊嚴』(Dri med sbas pa, Pek. No. 2711)

2711)

『宝樹と名づくる秘密集会註釈』(Celu pa, Pek. No. 2709)

2709)

『吉祥秘密集会恒特羅註釈』(Thagana, Pek. No. 2708)

2708)

『恒特羅吉祥秘密集会註釈』(Rdo rje bsad pa, Pek. 25



No. 2772)

『秘密集会合説獻供華』(Ratnākaraśānti, Pek. No. 2714)

『大修習本統現言吉祥金剛鬘諸統心藏妙分密意本統』

(Pek. No. 82)

『深密授記本統』(Pek. No. 83)

『智金剛普集本統』(Pek. No. 84)

『四天女請問』(Pek. No. 85)

『成就法略集』(Klu sgrub, Pek. No. 2661)

『大瑜伽怛特羅吉祥秘密会生起次第修習法經合集』

(Klu sgrub, Pek. No. 2662)

『五次第』(Klu sgrub, Pek. No. 2667)

『行合集燈』(hPhags pa lha, Pek. No. 2668)

『行集燈の台へへる広釈』(Śākya bśes gñen, Pek. No. 2703)

No. 2703)

『秘密』集会成就法安立次第』(Kluhi blo gros,

Pek. No. 2674)

『五次第釈珠鬘』(Kluhi byaṅ chub, Pek. No. 2697)

『略集成就法註釈宝鬘』(Ratnākaraśānti, Pek. No. 2690)

2690)

(b) くーべしちら (Hevajra) 系のものに關しては次の

ようなタントラを學んだ。<sup>②</sup>

『喜金剛本統王』(Pek. No. 10)

『茶枳尼金剛箋五茶迦成就法』(Mi thub zla ba, Pek. No. 2453)

No. 2453)

『吉祥喜金剛疏真珠鬘』(Ratnākaraśānti, Pek. No. 2319)

2319)

『呼金剛撰義広註』(Rdo rje sñin po, Pek. No. 2310)

『呼金剛怛特羅細疏持蓮華』(mTsho skyes rdo rje, Pek. No. 2311)

Pek. No. 2311)

『金剛句真髓集細疏』(Naro shabs, Pek. No. 2316)

『怛特羅茶枳尼金剛箋細疏初章口伝』(Indrabodhi, Pek. No. 2324)

Pek. No. 2324)

『護摩儀軌光苞』(Abhyākaraṅgupta, Pek. No. 3963)

『勝樂(輪制 Sambara) タントラに關しては次の

うなタントラを學んだ。<sup>③</sup>

『(吉祥) 上樂本統王略要』(Pek. No. 16)

『現説無上本統』(Pek. No. 17)

『亥母現稱教後篇中、亥母現覺』(Pek. No. 22)

『吉祥金剛空行(大)本統王』(Pek. No. 18)

『修習母普行本統』(Pek. No. 23)

『吉祥空行大海修習母本統王』(Pek. No. 19)

『吉祥上樂出現大本統王』(Pek. No. 20)

『吉祥輪律儀一百八名讚』(Pek. No. 2142)

『吉祥輪律儀細疏勇者悦意』(sKal Idan gras pa, Pek. No. 2121)

『吉祥輪律儀根本怛特羅細疏』(rGyal ba bzhan po, Pek. No. 2122)

『宝聚と名づくる細疏』(dKaḥ rgyal mi thub zla ba, Pek. No. 2120)

『一切功德處と名づくる註釈』(dPaḥ bo rjo rje, Pek. No. 2124)

『吉祥金剛空行神怛特羅真性善住と名づくる細疏』(Nor bzans, Pek. No. 2132)

『吉祥空行海瑜祇母怛特羅大王註釈船筏』(Padma rdo rje, Pek. No. 2136)

(d) 時輪 (Kālacakra) タントラに関しては、チョンデ  
ンラルティ (bCom Idan ral gri, 一二世紀初頭のナルタンの  
大学者) やレンダワは釈尊の説かれたものではないと非  
難したが、ツォンカパは、プトンに一七回もそれにつ  
いて聞いたチュキパルパ (Gon gsum bde chen pa Chos kyi  
dpal pa) から教えを受けた。更に、キョルモルン (sKyor  
mo lun) のシアル (Tshal) の聖者ケン = イェンキヤン

シハ (mkhas pa Ye ses rgyal mtshan) や、ジニナン  
(Jo nan) のチヨクレンナムギヤル (Phyogs las nam  
rgyal pa) から教えを受けた。時輪タントラに関して  
彼が学んだテキストは次のようなものである。<sup>②</sup>

『從勝初仏出現吉祥時輪本統王』(Pek. No. 4)

『吉祥時輪本統後本統心』(Pek. No. 5)

『吉祥時輪本統藏』(Pek. No. 6)

『甚分戒』(Pek. No. 7)

『撰怛特羅王時輪註釈根本怛特羅隨入一万二千無垢  
光』(Pek. No. 2064)

『具蓮華と名づくる細疏』(Pek. No. 2067)

『吉祥勝義祈願』(Pek. No. 2065)

『灌頂略説註釈勝義集』(Dpal Nāro, Pek. No. 2068)

その他、リヤ = ウヤ (bLa ma dBu ma pa) から伝  
近來の伝承 (he bryud) を聞き、チャンガタクパ = チヤ  
ンチヤ (sPyan sña grags pa Byan chub) の許では、  
ルパ (Mar pa, 1012-1097) とガンポーバ (sGam po pa,  
1079-1153 ミラレーンの弟子) から伝わったカーギヤ派の  
主たる優婆提舍である Nāro chos drug や Phyag rgya  
chen po lha idan を含む、パクキヤン (Phag mo gru  
pa, 1110-1170) やジクテンテン (hJig rten ngon po,

1143-1217) の全集を総て聞いた。ツァル (Tshan) 地方で

は、医学、文法学、詩、音韻学、天文学などを、それぞれその専門家に師事して学んだが、この地では特にチベット訳された甘殊爾と丹殊爾をよく読んだ。

#### (四) 学習した典籍が如何にして教えとなったか

『ラムリム』(Lam rim. 悟りへの修道次第) という語が独自の教義を現わす術語として定着したのは、アティーンシャ (Atisa, 982-1054) の『菩提道灯論』(Pek. No. 5343) 及びそれに対する自らの註釈 (Pek. No. 5344) においてであろう。『ラムリム』の教義に依れば全ての仏説は『ラムリム』を説くものであり、広大なるラムリムを説くものと、甚深なるラムリムを説くものとに分けられる。前者の伝統に属する者には、弥勒——無著——世親の系列が、後者の伝統に属する者には、文珠——龍樹——聖提婆の系列が配せられ、アティーンシャはこれら兩者を統合する者とされる。アティーンシャは弟子ドムトンパ (hBromston rGyal bahi hbyun gnas, 1004-1064) にその教えを伝えたが、ドムトンパが弟子に三様の説き方をしたことによって、三種の系統を生ずることになった。<sup>②</sup>

ポトワ (Po to ba Rin chen gsal, 1031-1105) からシャ

ラバ (Ša ra pa Yon tan grags, 1070-1141) へと伝承されたカダム・シェンパワ (bKaḥ gdams gshun pa ba) と、  
リンパワ (dGon pa ba dBaḥ phyug rgyal mtshan, 1016-1082) からネウスルバ (sNe hu zur pa Ye šes ḥbar, 1062-1138) へと相承されたカダム・ラムリムバ (bKaḥ gdams lam rim pa) と、チャンガバ (sPyan sna pa Tshul khriṃs ḥbar, 1033-1103) からチャエルワ (Bya yul ba gShon nu ḥod, 1075-1138) へと相承されたカダム・ダムガクパ (bKaḥ gdams gdams nag pa) との三つである。そして、これらの三つの系統は、シェンカバに至って再び統合されるのである。シェンカバは、カダム・シェンパワの伝承をニャルタコル (gNal gra skor) の大僧正チエキャプサンボ (Chos skyabs bzah po) から受け、カダム・ラムリムバとカダム・ダムガクパの伝承をホタク (Hho brag) の大僧正ナムカギャルツェン (Nam mkah rgyal mtshan, 1326-1401) から受けた。<sup>③</sup>

更にニャルロ (gNal lo ro) に五ヶ月間留まりて菩提道次第の実践法を中心として、トルンパ (gRo lün pa Blo gros hbyun gnas) の『テンリムチェンモ』(bsTan rim chen mo) を詳細に検討したことによって、『現觀莊嚴論』の全ての内容が、道次第のための教え(優婆提舍)

となることを単に頭で理解しただけではなく、心から納得したのである。以上のことを初めとして、論理学、弥勒の五部論、中観論書、密教の四種タントラの全ての内容が、どのようにしてツォンカバの上に修道のための教えとなったかに関しては、彼の自伝詩『トジエ・ドゥレン』(rTogs brjod mdun legs ma)を参照された。<sup>②</sup>

#### (五) 修道による証得の功德

三六歳の年(一三九二年)、文殊師利の勧めに従って隠栖し、師(ラマ)と主尊とを同一のものとして瞑想し誓願することなど、多くの資糧を行じた。その結果、四年後に、全ての典籍が、修道のための教えとなつてあらわれた。そうして、修道の一部ではなく、顕教密教の全体を実践することに、三八歳から五三歳まで専心したことによつて、法に説かれた通りの証得が心に生じたのである。<sup>③</sup>

オカチェルン (Hod kha chos lün) においては華嚴經を学び、菩提心と菩薩行とを実践した。即ち華嚴經に説かれる菩薩の心力と行とを一つ一つ観察し実践した。最初は多少たじろぐこともあったが、後にはよく習熟して、努力しなくても自然に、いかなる心力や行に対しててもひ

るむことなく、喜こんで行えるようになった。<sup>④</sup>

#### (六) 中観思想と密教(勝楽タントラ)の空性の悟得

ケートウプ著『秘密の伝記』(gSai bahi nman thar mnos grub sne ma)に依れば、ツァン・ン (gTsan ron) の地で、ツォンカバは、師のウマバ (dBu ma pa) の通訳を介して、文殊師利に法に関して数多くの質問を行った。その際に、文殊師利に中観思想に関して様々に疑義を糺した時に、ツォンカバは自己の考え方がプラーサンギカの考え方であるか、或いはスバータントリカの考え方であるかを尋ねた。それに対して、文殊師利は、そのどちらでもない、と答え、ツォンカバが(縁起によつてものが生ずるという)顕現の一面か空の一面かのどちらか一方に固執することがないように、と述べた。<sup>⑤</sup> このような多くの問題を通じて、文殊師利はツォンカバの中に、プラーサンギカとスバータントリカの相違、俱生の我執と遍計所執の我執、論理における否定対象 (dga'g bya) の粗大なる基準と微細なる基準、中観思想の証得の基準、プラーサンギカがどのようにに世俗語を説くか、ということなどに関して詳細に観察するための種子を植えたのであった。その際にまた、密教の一般的な修道と特殊

な修道の区別に関しては、秘密集会の五次第の本質と修道次第と了義未了義などの要点を教えた、と『秘密の伝記』には説かれている。

このように文殊師利は中觀思想と密教とを説明したが、ツォンカパにはよく理解できなかった。ツォンカパがそのことを告げると、文殊師利は、今述べたことを忘れないように記録し、そして、(1)師(ラマ)と主尊とを同一のものとして瞑想し誓願し彼らに近づくように行じ、(2)福德を積み心を浄化することに努め、(3)聖典の意味を道理をもってよく觀察しよく思惟する、という三つのことを行じ、安易に満足することなく努力し続けるならば、時がくれば、今文殊師利によって播かれた種子が芽を出して理解することができるようになるであろう、と答えたと言われている。

その後、隠栖地オカチェルンに戻って、中觀思想の理解に専念していた時、ツォンカパは龍樹とその五大弟子たちの夢を見た。夢の中で仏護はツォンカパの頭に彼の『中論註』を置いた。翌日この註釈書を繙いてみると、それまで分らなかったことが氷解したと言われる。その箇所は、『中論』第八章一二偈のC句

brten nas hbyun ba ma gtogs pa

に対する註釈を指すようである。それはツォンカパが『中論』を註釈する時に、何度もこの言葉を引用していることからそう考えられるのである。<sup>24</sup> このようにして空性を理解したツォンカパは、縁起を空として説かれた世尊を称えて『仏世尊無上師を甚深なる縁起を述べ給へる点より礼讃する善説心髓』(Tsh. No. 5275, (15))を著わした。ツォンカパの空性理解の特徴は、顕現ということによって有の辺が断ぜられ、空ということによって無の辺が断ぜられ、空性が因と果として顕われる、ということである。この考え方は、彼の著書『ラムツォナムスム』(Pek. No. 6087)の末尾に出ている。

ツォンカパが仏教全般にわたる該博な知識を持っていたことは、次のような伝承からも伺える。彼は三二歳の年に、メンカル＝タシテン(Mon mkar bKra 'sis gdon)に滞在して、チベットの学者の伝記を講義した。その講義の中で、かつてカシパ＝シェルセン(dKah bshi pa Sher 'phags pa)が一度に一七冊の書を講じたことがある、ということとを述べたが、それを聴講していた者の一人が、ツォンカパも同じことができるか、と訊ねた。彼が、努力をすればなんとかできるであろう、と答えた所、ゲシェンヤテン(dGe bshe 'ya ston)たちが、そうすることを熱心に請

うた。そこで彼は、二〇日間準備をして、講義に用いる全ての典籍を暗記してしまい、それらを全部折り曲げて胸にまきつけて講堂に臨んだ。最初の二、三日間は、聴講者の中にまだ到着していない者がいたために、ミラレーバやマルパなどの教えを説いた。五日目から毎日五種の書を講義した。途中で二種を終了し、更に二種を加え、結局次のような一七種の書を三ヶ月で講述し終った。

- (1) 『量評釈註』(Pek. No. 5717 (a))
- (2) 『般若波羅蜜多優波提舍現觀莊嚴頌』(Pek. No. 5184)
- (3) 『俱舍論』(Pek. No. 5591)
- (4) 『阿毘達磨集論』(Pek. No. 5550)
- (5) 『律 經』(Pek. No. 5619)
- (6) 『大乘經莊嚴頌』(Pek. No. 5521)
- (7) 『中辺分別頌』(Pek. No. 5522)
- (8) 『法法性分別頌』(Pek. No. 5524)
- (9) 『大乘最上要義論』(Pek. No. 5525)
- (10) 『根本中頌』(Pek. No. 5224)
- (11) 『六十頌如理論』(Pek. No. 5225)
- (12) 『広破論』(Pek. No. 5226)
- (13) 『空七十頌』(Pek. No. 5227)

- (14) 『廻諍論』(Pek. No. 5228)
  - (15) 『入中觀論頌』(Pek. No. 5261)
  - (16) 『四百論頌』(Pek. No. 5246)
  - (17) 『入菩提行論』(Pek. No. 5272)
- これらの講義を行いつつも、ツォンカパは日常の勤行、例えば金剛怖畏 (Vajrabhairava) の儀軌なども怠ることなく続けたと言われる。

## (七) 著 作

ツォンカパの著作の状況を、その代表的なものの場合について見てみることにしよう。

- (1) 『ラムリムチェンモ』(Pek. No. 6001)

四五歳の時ラテン寺(ドムトンパの創建した寺)において、アティーシャの図像の前で請願したことによって、釈伽牟尼を初めとしケンチェナムカギャルツェン (1326—1401) に至るまでの伝統の諸師たち、殊にアティーシャ (382—1054)、ドムトンパ (1004—1064)、ポトワ (1031—1105)、シャラバ (1070—1141) の諸師たちに、一ヶ月の間会うことができ、種々の疑義を訊ねることができた。そして最後に、ドムトンパらの三人はアティーシャの中に溶け込み、アティーシャはツォンカパの頭に手を置き、

ツォンカバが法を弘め、自ら悟りを求め人々の利益を行う  
ずるならば、それを助けよう、と言って消えた。このこ  
とに因んでツォンカバは、『菩提道次第付法諸師に對す  
る請願文、最勝道の開門』(Pek. No. 6003)を造っている。  
このような奇瑞によつて『ラムリムチェンモ』は著わさ  
れることになったのである。

本書は次のような五つの点で勝れた書であるとされて  
いる。<sup>③</sup>

(a) 説かれている内容が勝れているということ。つま  
り、文殊師利の教えである道の三種の要点(厭離・菩提  
心・正見)に基づいて、三種類の人(ブドガラ)という  
考え方で説明していること。

(b) 説き方が勝れていること。つまり、道の本質と次  
第と数とに過ちがないということ。

(c) 依頼人が勝れているということ。この場合の依頼  
人は、大翻訳官キャプチョクパル(skyabs mchog dpal)  
たちであつた。

(d) 場所が勝れているということ。説かれた場所は、  
ラテン寺という立派な寺である。

(e) 聴衆が勝れているということ。つまり、ケートウ  
プやダルマリンチェンなどの勝れた弟子たちが、その聴

衆であつたということ。

ケートブは『ラムリムチェンモ』に関して次のように  
言っている。

この書は、善知識に仕えることを初めとして、止観の  
修習に至るまでの大乘と小乗の修道と、更には密教の特  
殊な行法における修道に至るまで、その本質と次第とそ  
の数をも正しく説明するものである。この書の思想は、  
アティージャの『菩提道灯論』の特徴と、密教の道次第  
を正しく規定するものであり、無著・世親の考え方を理  
解し、その考え方に従えば、よく理解できるものである。  
そして、アティージャの教えの系統にはポトワなど多く  
の勝れた考え方があつたが、ツォンカバは、ゴクの翻訳官  
ロデンシェラブ(Blo ldan ses rab, 1059-1109)の『テン  
リム』と、その弟子トルンパ(Gro lün pa Blo gros hbyun  
pa)の『テンリムチェンモ』(この書は、パトナの図  
書館に収容されていることが最近分り、チベットハウス  
より出版の予定)とに依つて理解して、『ラムリムチェ  
ンモ』を作つたのである、と。

## (2) 『セルペン』(Pek. No. 6150)

ツォンカバは三二歳の時、ツァルのグンタン (Tshal  
Gün than) に趣き、そこで『般若経』及び『現觀莊嚴論』

に對する註釈に着手した。この書は多くの學者たちの稱讃を博した。サーキヤ派の翻訳官タクツァン (sTag tshah lo tsa ba) は、予てよりツォンカバの主張を批判していたが、この註釈には驚嘆し、「貴師の智慧という新たな太陽が昇る時、般若經と莊嚴論との蓮華が開花するのを見れば、私の高慢なる智慧の水蓮は凋んでしまう。深く広大なる智慧の倉を称讃します」と、自分の非を懺悔し、ツォンカバの才能を讃えて止まなかった、と言われる。<sup>③</sup>

(3) 『了義未了義論』 (Pek. No. 6142) と『中論釈』 (Pek. No. 6153)

五〇歳の年、セラのチヘイン (Se ra Chos sdins) 僧院で、ツォンカバは龍樹の『中論』に對する註釈を造ることを懇請された。その仕事に着手し、多くの書籍を渉猟したが、解決し切れない問題が多少あとに残った。そこで、師と文殊師利に請願をした所、ある時、般若經の二十空の註釈が、黄金のデーバナーガリー文字となって空中に現われ、それ以来、何度もその文字が現われるようになった。そのことがあって、『中論』の細かな点に至るまで疑問は全て解消した。そこで『了義未了義論』と『中論釈』とを著わしたのである。<sup>④</sup>

了義未了義ということに関する難解な点は、いくら多くの書を読み論理を学び、或いは現觀による功德を積んだとしても、正しく理解することはできない。ツォンカバは、文殊師利のおかげによって理解し得たのである。そのことは、『了義未了義論』の冒頭に説かれている通りである。また、彼は『入中論』の註釈 (Pek. No. 6143) も著わしている。

#### (4) 密教関係の著作

四八歳と四九歳の時にオルカ地方のジャンパリン (Byams pa glin) で、ナーガボーデー (Nagabodhi) の『吉祥秘密集会曼荼羅儀軌二十』 (Pek. No. 2675) に對する註釈と、『ガクリムチェンモ』 (Pek. No. 6210) とを著わした。<sup>⑤</sup>

秘密集会タントラの中で最も難解な点は、幻身 (Maya kāya, sgyu lus) を如何にして成就するか、ということにある。ツォンカバは、この問題を、秘密集会の『根本タントラ』と五人の聖父子たち (龍樹、聖提婆、月称、Āryasūtra, Nagabodhi) の著作によって、既に一〇年前に理解していた、と弟子たちに述べている。

『ガクリムチェンモ』が造られたのは、『ラムリムチェンモ』の著述を懇請しその完成を喜び、さらにその思



想的な展開を期待してこの度もその著述を願ひ出た偉大なる翻訳官キョブチョクパルサンポ (sKyabs mchog djal bzai po、彼は、ツォンカバ、レンダワと共にチベット仏教界に戒律の教えの重要さを説いた人としても知られてゐる) と、特にカーギュ派のバクモトツワ寺 (Phag mo gru ba) の官長チャンガソナムサンポ (sPyan sia bSod nam bzai po) の懇請に依る。ツォンカバの密教に関する主要な著作は以下の如くである。

『タントラ王吉祥秘密集のウバデーシャ 五次第を照明する燈なる書』(Toh. No. 5302)

『タントラの王吉祥秘密集の究竟次第たる 五次第を一頂座に円満する赤註』という書』(Toh. No. 5314)

『吉祥一切秘密最勝大秘密』というタントラの中の一会にして、吉祥秘密集の積タントラたる『四天女請問』の广大釈、"プラーナーヤーマの真性を明示す"と"こう書" (Toh. No. 5285)

『吉祥秘密集の積タントラ "智慧金剛集" の広釈、"タントラの釈法の要門を明示す" といふ書』(Toh. No. 5286)

『一切タントラ吉祥秘密集の広釈たる "燈作明" の句義を如実に解明する細註による複註』(Toh. No. 5282)

『タントラの王吉祥秘密集の広釈たる "燈作明" の難処の決定をなす "宝苗" という書』(Toh. No. 5284)

『一切のタントラの王吉祥秘密集根本タントラを "燈作明" と名づくる広釈によって釈せんとする場合の科段、撰義』(Toh. No. 5283)

『瑜伽自在者ルイバ造の "世尊制輪現觀" の広釈たる "如意牛" と名づくる書』(Toh. No. 5320)

『勝樂ラグタントラの広釈 "隱密の義を明示す" という書』(Toh. No. 5316)

以上ツォンカバの著作は、Ka (第一卷) から Na (第一二卷) までは密教に関するものであり、Pa (第一三卷) から Tsha (第一八卷) までは顯教に関するものである。そして更に、一般には公開されない秘密の書が一巻あり、全部で一九巻から成っている。

#### (ハ) モンラム大祭の創設

一四〇八年、ツォンカバ五一歳の年の暮れから、翌年の一月一五日にかけて、彼は八千人の比丘たちと共に、ラサで大規模な誓願祭を行った。彼は、それまで人々から布施された全財産を費して、チベットで最も尊ばれている大招寺 (チ = カン) の釈迦牟尼像 (Jo bo rin po che)

を黄金の冠や宝石類で莊嚴した。更に、ネパール王女の招来した仏像や十一面観音像にも銀製の冠を寄贈した。法が弘まり衆生に利益があるようにと誓願し、一般の人々には毎日、アールヤシェーラ(Aryasūra)の作った『本生鬘』(Pek. No. 5650)を説いた。

#### (九) ガンデン寺の建立

モンラム祭を終るに当って、弟子たちはツォンカパがこれ以上遊行生活が続けるべきではないことを決議した。新しい僧院はロリ山に築かれることに決った。彼はその僧院を弥勒菩薩の宮殿兜率天に因んでガンデン寺と名づけた。

多くの人々の寄進や奉仕によって、その年のうちに本堂と七〇以上の僧堂が完成した。翌年(一四一〇年)、ツォンカパはガンデン寺に移り、早速『ラムリムチェンモ』『秘密集会タントラ』『阿毘達磨集論』などの講義が始められた。

五〇歳も後半を迎えて彼は体に変調をきたしていた。弟子たちは、その不吉な兆候を克服するために、師にヤマータカ(yamāntaka)の儀軌を行うことを懇請した。そのため彼は、三〇名程の弟子たちと共にヤマーンタカ

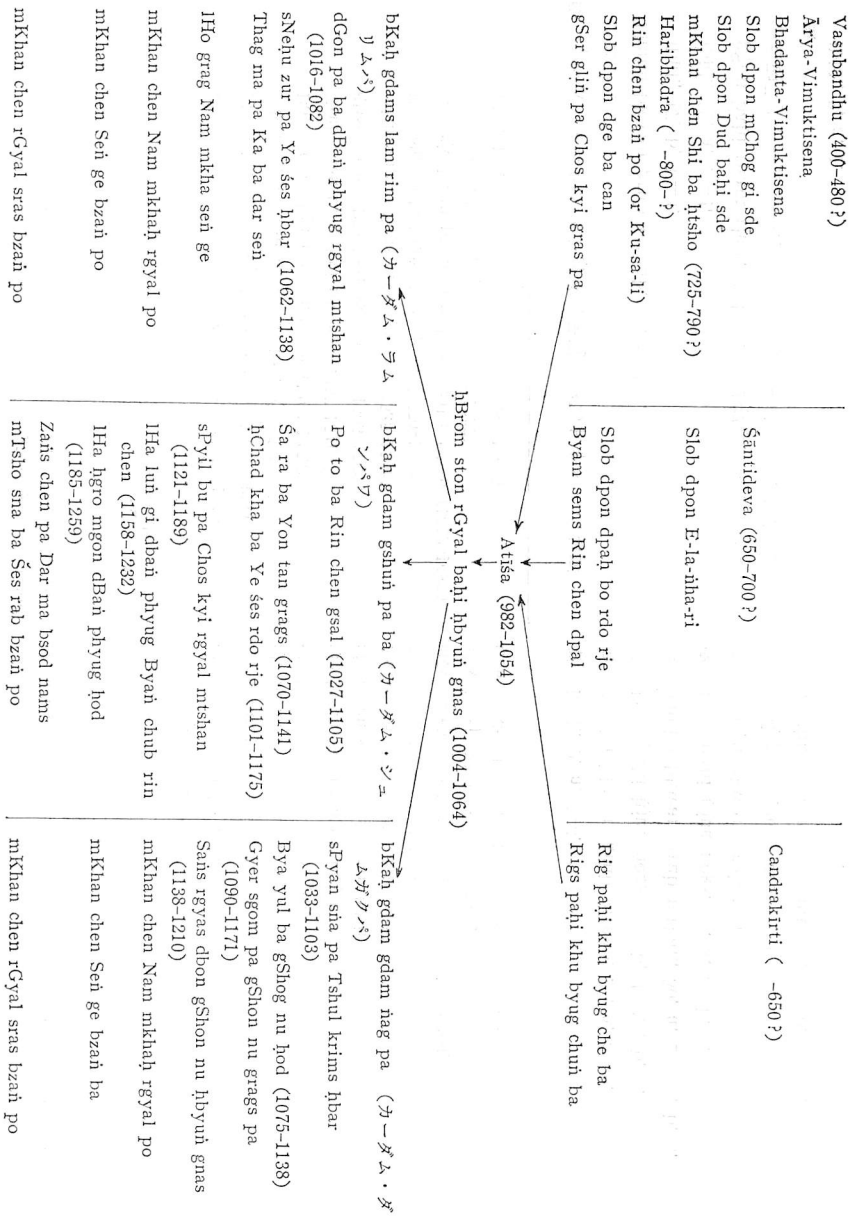
の行場に趣ぎ、一方ケートップを初めとする弟子たちは、師の安穩を願って延命のための儀軌を勤修した。その効あつてか、ツォンカパは健康を回復し、再び多くの僧院の招請を受けて講義に出かけることができるようになった。

六一歳の年(一四一七年)、月称の『入中論』に対する註釈『入中観広釈』(Pek. No. 6143)を完成した。その後、トルンやレブンなどの諸寺に招かれ、翌年、ガンデン寺に戻った。その日、多くの比丘たちと共に、一切の衆生の為の供養を行った。その夜から背中に痛みを覚えるようになった。翌日、彼は弟子のギャルツァブ(Gyal tshab Dar ma rin chen, 1364-1432)に冒子と衣とを譲った。一〇月二五日の早朝、空を觀想しつつ遷化した。六三歳であつた。(未完、以下次号)

#### 主要文献

1. rje btsun bla ma Tson kha pa chen poñi no mtshar rmad du byun bañi nam par thar pa dad pañi ñing hogs (著者 mkas grub rje dGe legs dpal bzang po, Toh. No. 5259, 略題 Dad pañi ñing hogs)
2. rje rin po cheñi gsan bañi nam thar rgya mtso lta bu las cha śas nñiñi shig yois su brjod pañi gñan rin po cheñi sñe ma (著者 mkas grub, Toh. No. 5261,





Iho grag Nam mkhah rgyal mtshan  
(1326-1401)

Mon grwa ba Tshul khrims bkra śis  
Gruwa gor Chos skyabs bzah po

Iho grag Nam mkhah rgyal mtshan  
(1326-1401)

bKah gdams gsar ma (新カマ派)

rJe Tsoñ kha pa Blo bzah grags pa (1357-1419)

rTogs idan hjam dpal rgya mtsho (1356-1428)

mkhas grub dGe legs dpal bzah (1385-1438)

Bo so Chos kyi rgyal mtshan (1402-1473)

Grub chen Chos kyi rdo rje (1457-1541 ?)

dBen sa wa Blo bzah don grub (1505-1566)

mkhas grub Sañs rgyas ye śes (1525-1591)

Pañ chen Blo bzah chos rgyan (1570-1662)

rDo rje ḥdsin pa Kun mchog rgyal mtshan (1612-1687)

Pañ chen Blo bzah ye śes (1663-1737)

Phur loog Nāg dbaḥ byams pa (1682-1762)

rJe btsun Bio bzah śhan grags

rJe btsun Gya mtsho mthah yas

rJe btsun bstān pa rab rgyas

rJe btsun Bio bzah nam grol

rJe btsun Bio bzah sbyin pa

rJe btsun skal bzah bstān ḥdsin

Dwags po skal bzah mkhas grub

Dwags po hjam dpal lhun grub

skyaḥs rje pha boñ kha Byams pa tshul khrims

skyaḥs rje khri byañ Bio bzah ye śes

Goñ sa skyabs mgon bstān ḥdsin rgya mtsho

②③ 『チン・ハ・ン・』 大正書院蔵チン・ハ・ン・参照  
チン・ハ・ン・

Thūḥu bkwan grub mthah, 17, a, 1-5.

②④ ibid., 17, b, 1-4.

②⑤ ibid., 18, a, 1-4.

②⑥ gSañ bahi nam thar, 2, b, 3. 松本和雄「チン・ハ・ン・  
中観思想」『東洋学術研究』第111巻第11号 p. 167-8参  
照。

②⑦ ibid., 3, a, 1.

②⑧ ibid., 9, a, 1-6.

②⑨ Thūḥu bkwan grub mthah, 21, a, 5-6.

②⑩ Dad pahi hjug ḥogs, 21, b, 4-22, b, 1.

②⑪ Thūḥu bkwan grub mthah, 30, a, 2-30, b, 3.

②⑫ Dad pahi hjug ḥogs, 35, a, 5-b, 5.

②⑬ Thūḥu bkwan grub mthah, 32, a, 1-2.

②⑭ Dad pahi hjug ḥogs,

②⑮ Thūḥu bkwan grub mthah, 32, b, 6-33, a, 3.